



市民とともに、おにクルができるまで「育てる広場」プロジェクトブック 茨木市

市民とともに、
おにクルができるまで

育てる 広場

プロジェクトブック

茨木市

1



「育てる広場」プロジェクトについて

P.02

2



プロジェクトに参加した市民

P.14

3



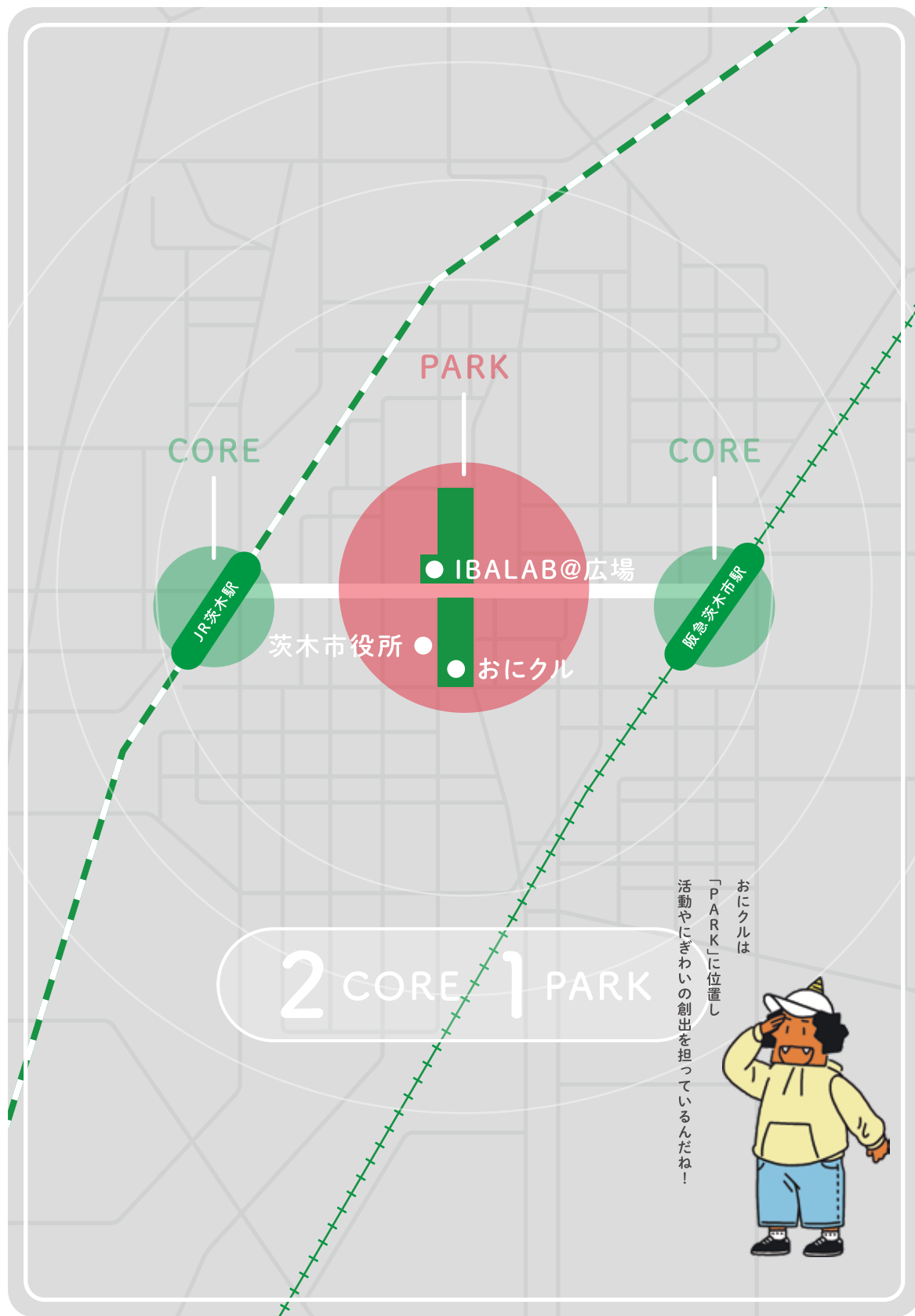
「育てる広場」プロジェクトのプロセス

P.44



「育てる広場」プロジェクトについて

茨木市では、市民との対話を重視した市政運営を進めています。その第一歩として、2015年12月に閉館した市民会館を含む、跡地エリアの活用に向けたプロジェクトが翌年スタートしました。構想段階から市民と対話し、社会実験など実際に活動しながら、設計や活用ルール、しくみを検討するなど、市民参加を重視したプロセスが特徴です。1章では、市民会館跡地エリア活用のキーコンセプト「育てる広場」、それを踏まえたおにクルの設計意図、そして、これまで実施してきた市民参加の取り組みをさまざまな数字で表し、プロジェクトの概要を紹介していきます。

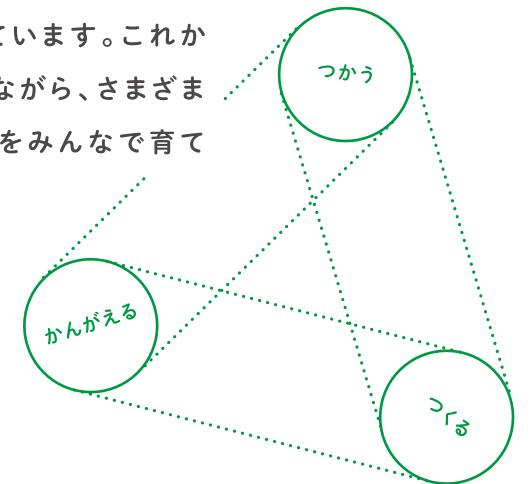


市民会館跡地エリア活用キーコンセプト

「育てる広場」とは

おにクルを中心とした、市民会館跡地エリア活用のキーコンセプト「育てる広場」。「100人会議」など、市民のみなさんとの対話から、このコンセプトが生まれました。複合施設おにクルでは、さまざまな人が集まり、さまざまな機能や活動が交わります。その“場”をどのように使い、どのように変えていくかをみなさんと一緒に考え、育てていく場にしていきたいとの想いがこめられています。これからも“つかう”、“つくる”、“かんがえる”、を繰り返しながら、さまざまな人たちが関わり合い、つながりながらこの“場”をみんなで育てていきます。

市民とともに、おにクルができるまで



定点カメラ
おにクルができるまで

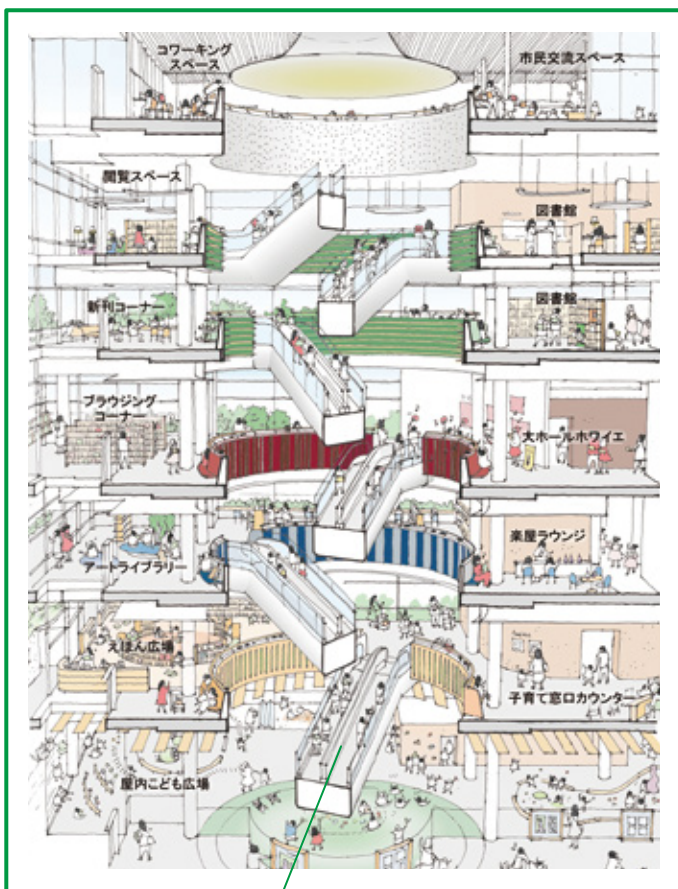




「立体的な公園」を市民とともに作る

市民のみなさんとの対話から生まれた「育てる広場」のキーコンセプトのもと、開放的なテラスや緑を各階に配置し、元茨木川緑地の豊かな緑と建築が浸透しあう「立体的な公園」のような公共空間の提案が採択されました。公園とは緑があるだけでなく、人々が思い思いに過ごし思い思いの活動

ができる場所です。それを実現させるため、壁や柱をできるだけ減らし、気持ちいい風が吹き抜けるような空間としました。また、全7フロアを上下に貫く空間「縦の道」により、フロアを越えたにぎわいと交流が生まれやすい工夫が施されています。設計段階から、設計者とこの施設を実際に利用していく市民とが一緒になって、おにクルをどのように使いたいか、



「縦の道」でつながる

特徴的な「縦の道」は、7層の床を貫く吹き抜け空間と、それを回遊するようにつなぐエスカレーターで構成されています。各階が吹き抜けでつながることにより、音や空気、雰囲気などがゆるやかにつながり、滲み出します。それは、館内を訪れた人たちをつなぎ、本来の目的地とは異なる場所へ誘う役割を担っています。

そのための設計はどうあるべきかについて模型や図面を使って考えました。その後の施工段階でも、施設内で使うA型看板を市民のみなさんと制作したり、2階テラスの「おはなしのいえ」のタイルを子どもたちに貼り付けてもらったり、茨木市の里山とまちなかをつなごうと、里山センターの埋土種子

を1年半かけて各家庭で育て、おにクル完成時に植樹するなど、専門家だけでなく、市民のみなさんと共に建物をつくり上げ、設計、施工の段階から「日々何かが起こり、誰かと出会う」状況を生み出してきました。



「日々何かが起こり、誰かと出会う」場



おにクルはさまざまな機能が集まった施設なので、こどもから高齢者まであらゆる年代層の人たちが来るでしょう。おにクルに行けば誰か一人ぐらい知り合いに会うのではないかと思います、「日々何かが起こり、誰かと出会う」をテーマにしようと考えました。

私は小さい頃、父親によく銭湯に連れて行ってもらいました。当時銭湯は地域の社交の場でした。茨木市ではおにクルが昔の銭湯のような場所になってくれたらと思っています。だからこそ壁を減らし、風が吹き抜け、他のフロアの気配が感じられるような空間をつくりました。縦の道を通るとき、下の階にいる人を発見できたり、行き先とは異なる階でおもしろそうなことを見つけられたりするでしょう。誰かと出会えるのではないかという期待感とともに、いろいろな場所を歩き回ってほしいと思います。そうするときっと思いもよらないことが起こるでしょう。

名称「おにクル」

名称に込めた思い



施設名称の「おにクル」は、一般公募で集まった約2,700件の中から市民投票を経て決定されました。命名は市内に住む当時6歳のお子さん。茨木市内のあちこちで目にする鬼のキャラクター「いばらき童子」を見て、「楽しそうで怖い鬼さんも思わず行きたくなっちゃうような場所になるといいな」という意味を込めたそうです。

おにクル ロゴマーク

マークは力強い鬼の目と広がりを見せています。鬼の目とツノ、7層のフロアを貫く吹き抜け空間「縦の道」を俯瞰した様子を螺旋で表現しており、おにクルが茨木市のシンボルとして大きな存在になるようにとの思いが込められています。

数字で見る市民参加

市民会館が閉館してからおにクルが完成するまでの間、市民会館の跡地や市内の各所を活用しながら、市民のみなさんと共におにクルがどうあるべきか、どう使っていきたいか、どういう場所にしたいかについて考えてきました。その軌跡の一部を、数字で表現しました。

市民参加ワークショップ

市民のみなさんにご参加いただいたワークショップに関連する数字を集めました。(2023年11月5日までの集計)

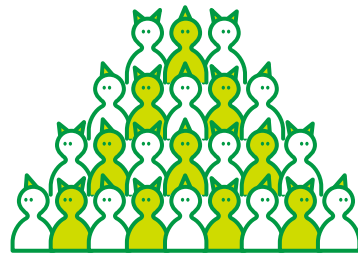
市民参加ワークショップ開催回数

108回

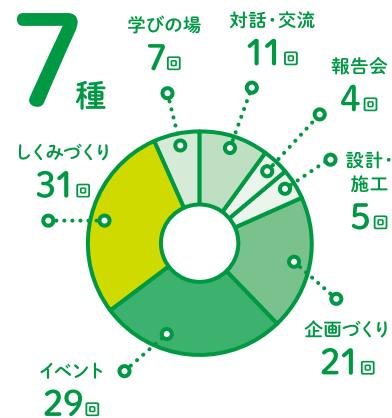


参加者延べ人数

2,217人

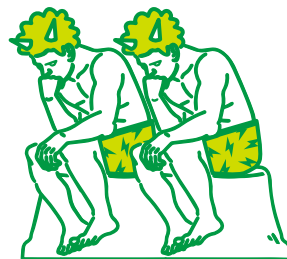


ワークショップの種類



市民と一緒に作り、考えた時間

5,500時間



プレイベント

市役所の複数の部署や、市民のみなさんとコラボレーションしたイベントをまとめました。



その他の参加

寄附への参加 (2023年9月5日までの集計)

寄附区分	目標額(万円)	件数(件)	寄附額(円)
第1弾「言葉」を育てるプロジェクト	—	238	46,515,419
第2弾「ピアノ」を育てるプロジェクト	—	50	450,000
第3弾「えほんひろば・おはなしのいえ」を育てるプロジェクト	200	150	3,364,000
第4弾「宇宙とふれあえる場」を育てるプロジェクト	150	171	1,624,000
第5弾「遊び」を育てるプロジェクト	100	102	1,251,606
合計	—	711	53,205,025

おにクル愛称

愛称の応募総数
2,677件

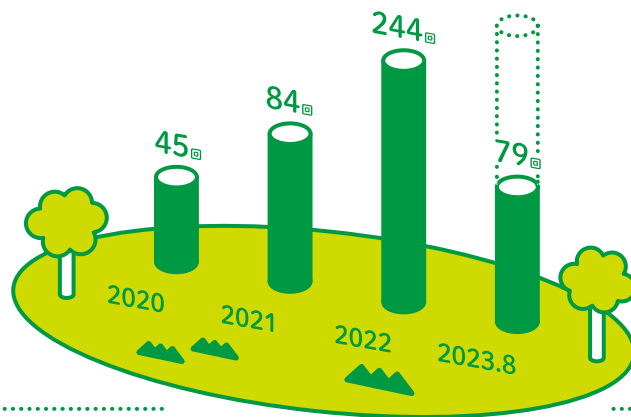
投票総数
3,473件

IBALAB@広場のイベント

市民会館の跡地を実験の場として整備したIBALAB@広場の活用に関する数字を集めました。(2023年8月までの集計)

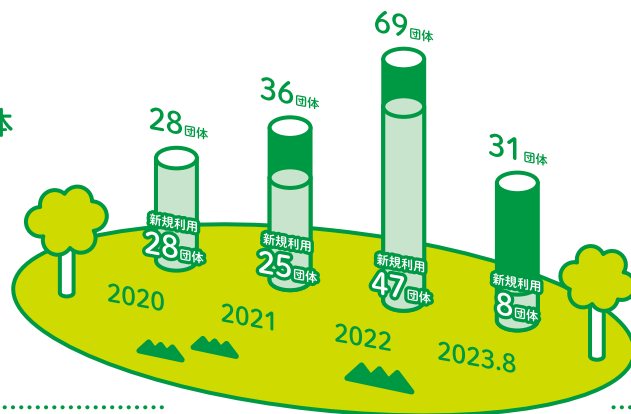
利用申請数

452回



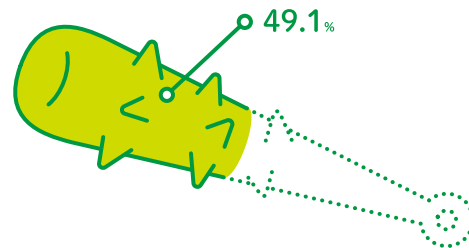
利用団体数

108団体



リピート率

49.1%



IBALAB@広場のイベントカテゴリー

IBALAB@広場では、さまざまなイベントや取り組みが展開されました。そのカテゴリーと回数をまとめました。(2023年8月までの集計)



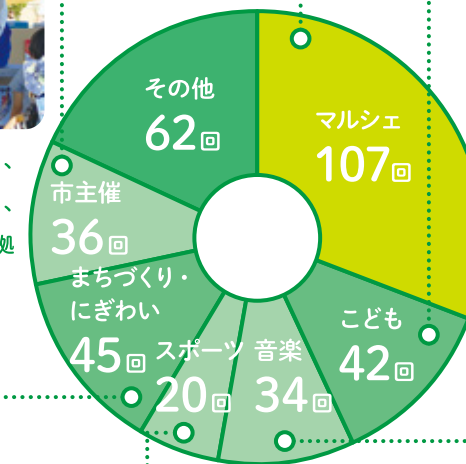
IBALAB@広場といえばマルシェといっても過言ではありません。市内の農産物が主役のものや、ハンドメイド、地域密着型の出店など、内容もさまざまです。



芝生広場は、子どもがはいはいしたり、寝転がったりのんびり過ごせる場所。それもあり、子ども向けのイベントが多いです。夜にはみんなで花火もしたり。



アートや文化のイベント、読書、農業の推進など、さまざまな施策の発信拠点にもなりました。



まちににぎわいを生むイベントだけでなく、“まち”について考える企画などもありました。



芝生広場ではヨガ企画、アクティブに動ける下の広場ではスケートボード企画なども。



屋外空間で聴く音楽は気持ちがいいですね。ジャズや高校生バンド、DJ企画まで、幅広く実施されています。